

♪ゲンズブール「アコーディオン」その4(承前)♪

4番のクープレでは、いつか来るアコーディオニストとアコーディオンの蜜月の終わりが予告されます。歌も終わります。(以下歌詞引用)

《4番クープレヘルフラン》

でも或る日倦怠に

アコーディオニストは挫け、寂しさが

現れる世界は

かつてのアコーディオンのもの

アコーディオニストがアコーディオンを手放して得るのは

古道具屋で50文

それでもう誰も気に止めなくなる

アコーディオンにへさあさ、お恵みを

施しを、響く調べにアコーディオンに(歌詞引用ここまで) Gainsbourg en 1972©ポップ・フランセーズ



ニゲンズブール、お前は誰だ！ニ

作詞作曲歌手以外にも映画監督俳優様々な顔を持つゲンズブール。「ポップ・フランセーズ名曲101徹底ガイド」フランスは愛と自由を歌い続ける(音楽出版社)の著者向風三郎氏が最近のブログで使った表現を、注釈を補いつつお借りしましょう:(以下引用)「(本名の)リュシアン・ギンズブルグから(アーティスト)セルジュ・ゲンズブールになり、(自己の実像と虚像の分裂が)ゲンズブールから(さらに生み出した)影の分身ガンズバールがあって、(職業として最初に志した)画家、(糊口をしのぐために転身した)バー・ピアニスト、シャンソニエ(自作の風刺シャンソンを歌う寄席芸人)、自作自演歌手、映画俳優、映画監督、(これと次は職業ではありません。それに歌詞や発言でそういうことをほのめかすが決定的にそうだと決して自分でも言いません。けれども自らのイメージにそういったレッテルを意図的にまとわりつけているとしか思えません。そういう自己演出されたイメージとしての)性倒錯、ロリータ偏愛、詩人、(名門出版社から小説が出版されている)作家、CM作家、魅惑のクルーナー(美声歌手)、(「ナチのロック」とか「海とセックスと太陽」などというところでもない曲を歌う)ロッカー(ロック歌手)、(単身、本場ジャマイカに乗り込んでアルバムを制作した)ラスタマン(レゲエアーティスト)、(ヴァネッサ・パラディ、イザベル・アジャール、カトリーヌ・ドヌーヴ、アンナ・カレーナ、ブリジッド・バルドーなど本当に多数の)美人歌手(の)プロデューサー(もちろんプロデュースしたアーティストとのスキャンダルも一度ならず)、(生放送で紙幣を燃やして法を

破ったり、ホイットニー・ヒューストンにとんでもない発言をしたりスキャンダルをまきおこす)テレビ挑発人、(これまた本場ニューヨークでアルバム制作の)エレクトロ・ファンクマン、近親性愛者(性倒錯とロリータ偏愛の合体、自分の娘と歌った曲でモチーフとしてひげらかし、実際の歌詞では周到に仮定の話としてしているけれど、世間が「そういう人」として誤解するのは放置しておいた様に思われます)、(フランスタバコのジタンやアルコールを大量摂取したり不摂生の限りを尽くして自業自得の)病人....。(引用ここまで。括弧内は著者が補足)と、こういう人物です。

ゲンズブールとは過剰に役割を演じすぎて虚実が入り混じるアーティストなのです。ここで採り上げた「アコーディオン」でも、最初はストリートミュージシャンの日常が描写されますが、服のボタンとベルトをアコーディオンと共有する3番の歌詞で、あっさりリアリティは超えられてしまい、最後には僅かな金と引き換えにアコーディオンを手放してしまう孤独な想像図を未来形で描いて終わります。(この項終わり、次回はレオ・フェレ「三文ピアノの唄」)

・・・お知らせ・・・

「シャンソンとアコーディオン」のトークがあります。2009年2月22日(日)午後1時からお茶の水谷口楽器で行われる「サンデー・アコーディオン・トーク」で筆者が「パリ」の空の下についてお話しをします。この連載で触れた映画のシーンや録音も実際にご覧頂き、お聴き頂きます。いろいろな編曲で「パリ」の空の下をご来場者の皆さんにご披露頂く予定もあります。